

髪をかきあげる

鈴江俊郎

登場人物

男（中川）

男（村井）

男（早川）

女（飯田トモヨ）

女（石井めぐみ）

夫

妻

第一場 トモヨの部屋

室内。昼のへや。似合うような似合わないようなガラスのテーブルの上に、男（中川）が立っている。夏の夜。風を受けているようだ。

中川 ふるるるるるる。……馬。

中川、天井から下がっている電灯のコードを引つ張るしぐさ。暗くなる。女（トモヨ）の音がする。

トモヨの声 こい。

中川の声 ふるるるるるる。

トモヨの声 なにに。

明るくなる。中川がコードをひっぱったのだ。

トモヨは麦茶の入ったガラスの茶いれとコップ二つを抱えて部屋の隅に立っていた。

中川 馬。

トモヨ 馬ってなに。

中川 馬だよ。ふるるるるる。

トモヨ ……。

中川 気持ちよさそうだと。

トモヨ、無視して中川の立つテーブルに手にしたもの置きこうとする。中川、その反応にいきさかの苛立ちもあつて、あかりを消す。

トモヨの声　　こらあ。

中川の声　　ぶるるるるるう。

トモヨの声　　もうないい。

中川の声　　だから馬だつて。

トモヨの声　　やめなさいよ。つけないさいよ電気。

中川の声　　ぶるるるるるるう。

闇の中で、女の剣幕と電気をつけようとする若干の気配が伝わる。あかりがつく。

トモヨが電気のコードに手を伸ばしかけているところだった。

中川　　だから馬だつて。

トモヨ　　……。

トモヨ、落ち着いて手にしたものをテーブルの上に置く。

中川　　馬がね、いたんだよ。山の入り口に。一頭だけ。気持ち良さそうだった。おじさんが水をかけてた。笑つてた。

トモヨ　　笑わない。

中川　　笑うんだよ。

トモヨ　　笑わない。

中川　　笑うんだつて、馬は。こうやって唇のはしっこ上げて、白い歯見せて。

トモヨ　　くちびるつてなに。馬の唇つてどこ？

中川　　ここ。口のはしっこ。

トモヨ　　メス馬だったら口紅ぬるんだね。

中川　　口紅ぬつてたよ。メス馬だったから。艶然と笑う。

トモヨ　　おりなさい。

中川、テーブルからおり、トモヨの向かいに座る。

中川　　うそです。笑いませんでした。

トモヨ　　……。

トモヨ、コップに水を注ぐ。

中川　　口紅はないよなあ。大量にへっちゃう。こんな大きな口紅がいる。なんちゅうかそれはあたかもコケシのような。

トモヨ　　飲んだら。

中川　　……電気代がかかるかな、と思っただけだぞ。

トモヨ　　……。

中川、立つて電気を消す。

トモヨ　なにい。

中川　すずしいー。

トモヨ　……。

中川　ほら。こうしてるほうがな。

トモヨ　……すずしいの？

中川　馬になれる。

トモヨ　……。

中川　偶然の発見……

明りがつく。トモヨがコードをひっぱったのだ。

トモヨ　電気代は気にならないんです。もうすぐクーラー切るんだから。

中川　へ。

トモヨ　麦茶飲んだら帰るんです。

中川　そうなの。

トモヨ　そうでしょ。

中川　……。

トモヨ　おりて。

中川、テーブルからおりる。

中川　寝苦しいよ、クーラー切ると。

トモヨ　熱帯夜、身悶えしながら若い女は一人眠る。

中川　なにも身悶えしなくたって。

トモヨ　するの。したいの。身悶え。

中川　……。

トモヨ　身悶え。

中川、立つ。シャツのボタンを外す。

トモヨ　なに。

中川　一人で悶えるのはよくない。

トモヨ　え。

中川　二人で悶えよう。

トモヨ　え、

中川　決めた。

トモヨ、立つ。

トモヨ　だめだよ。

トモヨ、中川のシャツのボタンをはめてやる。

トモヨ　時間切れだから。

そして、茶を差し出す。

トモヨ　はい、飲んで。

中川　……。

トモヨ、座る。茶を飲む。

トモヨ　なに。用事は。

中川　ないよ。別に。

トモヨ　なんだ、それ。

中川　なんだそれ、ってなんだよ。

トモヨ　こんな遅い時間にきて。

中川　ちよつとまでよ。あのなあ。

トモヨ　なに。

中川　用事がなかったらきちやいけないのか？ そうなのか？

トモヨ　そんなこと言ってないよ。

中川　言ってるよ。いま言ったよ。

トモヨ　言ってないじゃない。何か言った？ 今。私。

中川　言ったよ。

トモヨ　何を。

中川　なんだそれって。

トモヨ　なんだそれ。

中川　ほら言った。

トモヨ　なに。

中川　……暑い夜に、月を見ながら歩いてらたふと顔が浮かぶって、そういうことってあるだろ。

トモヨ　いいじゃないの。浮かんだら。それで。嬉しいんですよ。

中川　へ。

トモヨ　嬉しいんですよ。うかんで。

中川　へ。

トモヨ　会えたんですよ。会ってるじゃない。嬉しいんですよ。

中川　うれしくないよ。別に。

トモヨ　あらそう。私、うれしいよ。

中川　へ？

トモヨ　むつかしいもんですなあ。男女の仲というのは。

トモヨ、茶を飲む。

中川　なんだよ。

トモヨ　なにが。

中川　だから、なんだと思ってるんだよ。

トモヨ　なんのこと。

中川　なにを、どういう風に思ってるんだよ、お前は。

トモヨ　なに。うれしいよ。って思ってるよ。って言ってるじゃない。

中川　違う。思ってるない。

トモヨ　思ってる。思ってるって。

中川　俺はお前のなに？なんだと思ってる？

トモヨ　なんですかいまさ。あらたまって。

中川　あらたまるよ。いまさらだよ。どうなの。

トモヨ　へ。

中川　どう？

トモヨ　……うーん。

トモヨ、茶を見つめる。

トモヨ　飲んだら？

中川、飲む。

トモヨ　彼氏。恋人。……かーつ。

中川　なに。かーつ、て。

トモヨ　だって。かーつ。……セックスフレンド、だな。

中川　そうなの？

トモヨ　性的関係者、と訳す。

中川　訳すなよ、そういうふうに。

トモヨ　だって、そういうことでしょう。

中川　そういうこと。

トモヨ　実際、そうなんだもん。不思議なくらいなんだもん。

トモヨ、茶を飲む。

トモヨ　じーっと、見つめるでしょ。考えて。……ほら。

中川　ほらってなんだよ。

トモヨ …… 胸の中。そういう感じ。目をつぶるでしょ。君はここにいない、と仮定してみる。いないんだ。
だから、私は君のことを思い出すしかない。アゴの形。薄い眉。柔らかいのだ……ほら。

中川

……。

トモヨ

ふしぎでしょ。

中川

わからないよ。

トモヨ

あけてみせようか。今、ここで。胸の中。

中川

……。

トモヨ

君が裏切ったからだ、と世間の人は言うでしょう。

中川

……。

トモヨ

そういうことにしておこう。

トモヨ、中川の胸に手を伸ばす。

中川、その手をつかむ。

中川

泊まるよ、今日は。

トモヨ

だめだよ。

トモヨ、手を振り払い、茶を飲み干す。

トモヨ

ルールだからね。…飲んで。

中川、ただトモヨを見ている。

トモヨ、立つ。次の部屋に去りかけて、

トモヨ

私は飲んだ。

中川

ホタル見に行こう。

トモヨ

いないよ。ホタルなんか。

中川

いるよきつと。

トモヨ

どこに。

中川

川。

トモヨ

昨日の雨でドトウの濁流状態だつせ。

トモヨ、去る。

中川

濁流だつたらいいのか。

トモヨの声 …… いるわけじゃないこのあたりに。だいたい季節が遅いよ実際。自然というものを知らないんですなあ、最近の若者は。

中川、飲み干す。

立つ。テーブルの上に乗る。明りを消す。

中川の声　ぶるるるるう……一頭だけの馬は、おじさんと一人で暮らしてるみたいだった。ちつともうれしく
なんかなさそうだった。

明りがつく。トモヨがつけたのだ。

トモヨ　いぢそつさま、は。

中川　いぢそつさま。

暗転。

第二場　トモヨの部屋

トモヨが一人、立っている。電気を点けたのだ。
中川が立っていた顔のあたりの空間を見ている。

トモヨ　雨がやんで、風が止まって、風が吹く。

トモヨ、電気を消す。

トモヨ　風が、少し、吹く。

トモヨ、電気を点ける。

トモヨ　地面から、さつそく水蒸気がわいてあがる。

トモヨ、中川の残していったコップを眺める。

トモヨ　水蒸気はアスファルトの匂いがある。アスファルトの細かい粒々が地面からわいてあがる。肺をおか
す。

トモヨ、そのコップを持って台所に去る。

トモヨの声　肺にまつ黒い粒々がしみこんでいく。ひだとひだの間を埋めてゆく。こまかく、薄く、すみっこから。

トモヨ、入場。入場したばかりの部屋の隅に立つ。部屋を眺める。

トモヨ　すみっこからおかされた肺は気がつかない。しだいしだいに力をなくす。力をなくして、息がとまる。

トモヨ、コップの水を飲み干す。

トモヨ　私のそばには人がいない。

トモヨ、中央に進み、電気を消す。

トモヨの声　人が、いない。

トモヨ、電気をつける。中川の去った方向を見る。

トモヨ　どうして帰るんだ、バカ。

トモヨ、立ち尽くす。しばらくして、中川の踏みつけたテーブルをなでて、

トモヨ　涙もでやしない。

暗転。

第三場　螢のいない川辺

暗転の中、夫婦が登場。懐中電灯をつけて、少し離れて歩いていく。前を妻、後ろを夫。

夫　ちよつとちよつと。

妻　はい。

妻、立ち止まる。懐中電灯を消す。妻、立ち止まり、懐中電灯を消す。

夫　ちよつと待つて。
妻　……いますか。
夫　……いや。

夫、懐中電灯を点ける。足元の地面を照らしている。妻もつける。
夫、しゃがむ。地面の凸凹を見ている。懐中電灯を消す。妻、消さない。

夫　もう一回消してみようか。
妻　いませんよ。こんな時期に。
夫　もう一回だけ。

妻、消す。

妻　……いないでしょ。
夫　いないねえ。

妻、点ける。夫、地面に腰を下ろしたようだ。それを妻は照らす。

妻　地面、濡れてますよ。まだ。
夫　いいよ。
妻　昨日、雨。強かつたんだから。
夫　いいよ。

妻もあきらめてしゃがむ。夫に遠慮して、懐中電灯を自分の足元しか照らしていない。

妻　なんだか怖いですね、まっくらで。
夫　ああ。

妻、懐中電灯で夫の顔を照らす。

夫　なに。
妻　いえ。
夫　まぶしいよ。
妻　はい。

妻、懐中電灯を自分の足元に向け直す。

妻　どんな顔してるのかな、と思つて。
夫　こんな顔だよ。

妻 はい。
夫 どんな顔してると思ったの。
妻 いえ。別に。
夫 鬼みたいな顔。
妻 そんなことじゃなくて。おかしくなつて。
夫 おかしい。なにが。
妻 あんまりまつくらだから、おかしくなつて。
夫 え？
妻 おかしいでしょ。

夫、懐中電灯をつける。下から自分の顔を。妻に見せるように。鬼のような形相を作っている。間もなく消す。

夫 おかしい？
妻 ……おかしい。
夫 こわかった？
妻 ……こわくない。

妻の懐中電灯も消えた。と思いきや、つく。妻も自分の顔を下から照らす。鬼のような顔を作っている。間もなく消える。

夫 ……こわくないよ。
妻 そうですか？
夫 おかしいけど。
妻 そうですか。
夫 やめよう。
妻 どうして。楽しくないですか。
夫 いや少し。少しだけ楽しいけど。
妻 じゃ続けましょうよ。もう少し。もう少し楽しくなるかもしれない。
夫 エスカレーターするかもしれないじゃないか。
妻 あら楽しそう。
夫 なんだかものすごい力オを見る羽目になりそうな気がする。
妻 だれの。
夫 あなたの。
妻 どうして？見たんですか。
夫 見たつてなにを。
妻 いえ。別に。
夫 なに？おまえそんなの？
妻 なにがです。
夫 ものすごい力オするの？

妻　いつですか。
夫　知らないけど。時々。
妻　どうして。なんのために。
夫　だから知らないって。
妻　しませんよ。失礼な。
夫　そりやそうか。
妻　あなたはどうかなんです。
夫　おれ？おれがなに。
妻　あなたはすごい顔しないんですか。
夫　俺は大丈夫だよ。
妻　どうして。根拠は。
夫　ないけど。別に。でも大丈夫なんだよ。俺は自信ないもん。
妻　自信って。
夫　ものすごい力オする自信。
妻　じゃまるで私は自信あるみたいじゃないですか。
夫　そんなこと言ってないよ。
妻　私、自信ないですよ。そんな。ものすごい力オなんて。
夫　ごめん。
妻　失礼な。

妻、懐中電灯をつける。足元を照らす。

妻　けっこう大変な顔でしたよ。
夫　そう？
妻　さつき。あなたの。
夫　そう？
妻　でも、その、ものすごい力オってどんなの？
夫　想像するだけけど。
妻　どんなの？
夫　うーん。
妻　たとえば。
夫　うん。……ちよつと待って。
妻　はい。
夫　今、想像してるんだけど。

妻、懐中電灯を消す。間。点ける。

妻　なんだか、こわくなった。
夫　でしよ。
妻　モノスゴクなりそうな気がした。

夫　　でしよう。だからやめよう。

妻　　うん。

夫　　こわいよ。

妻　　うん。やめましょう。

夫、懐中電灯をつける。足元を照らしている。

妻　　おしり、冷たくなってきたでしょう。

夫　　大丈夫だよ。

妻　　いまに冷たくなりますよ。

夫　　平気だよ。

妻　　おしりが冷えるとすぐ下痢するんですよ、あなたは。

夫　　……。

妻、夫のおしりを照らす。夫、その光を嫌がつて手で払うしぐさ。

夫　　はやったことがあつたな。

妻　　なにが。

夫　　ものすごい顔するのが。兄弟で。

妻　　兄弟？お兄さん？

夫　　そう。小学生の頃に。二人でいるときに、突然ものすごい顔する。おもしろかったんだよ。バカみたいに
おかしかった。不意うちをするのがポイントなんだな。予期してないところに『おい』つてやられると、あ
あつ、くやしいつ、て。

妻　　あのお兄さんがですか。

夫　　そうだよ。だからハラハラしながらタイミングをうかがう。幼い兄弟二人がうつむいて、田圃の畔道をぐ
るぐるぐる無表情に歩き回って。不気味だったろうね、母親は。あれはなにかの訓練になって、大人に
なった今、なにかの役に立ってるんだらうかね。

妻　　立ってるんですよ、きっと。子供の遊びで無駄なものはないにもありませんよ。

夫　　そうかな。

妻　　だから今、とても上手だったじゃないですか。

夫　　なにが。

妻　　カオ。私、びっくりしましたよ。

夫　　それがどうした。

妻　　特技じゃないですか。いいじゃないですか。

夫　　それがなにか世の中のためになってるのか。

妻　　さあ。知らないけど。

夫　　ほらみる。

妻　　素敵な特技ですよ。

夫　　素敵？

妻　　そうですよ。あなたはだから素敵ですよ。

夫　　そう？
妻　　そうですよ。
夫　　……。ありがとう。

妻、懐中電灯を消す。夫、懐中電灯をつけ、妻の顔を照らす。妻、夫を見つめたまま、表情を変えない。夫、懐中電灯を消す。

妻　　ほんとですよ。
夫　　……。うん。でも馬鹿な兄弟だ。
妻　　そうですか。
夫　　でも小さな兄弟っていうのはいいもんだよ。思い出したよ。
妻　　そうですか。
夫　　いいもんだよ。
妻　　……。

妻、懐中電灯をつける。

妻　　おうちに帰りましょう。
夫　　歌を詠んだよ。今朝。
妻　　うた、ですか。
夫　　うた。
妻　　俳句ですか。
夫　　自由律の、ってやつ。
妻　　なにそれ。
夫　　きいてもらなさいよ。そりや感動するから。びっくりするから。
妻　　ほんと？
夫　　きかせようか。
妻　　俳句でしょ。
夫　　自由律だよ。
妻　　私、ちよつとわからないと思う。
夫　　大丈夫。わかるから。感動するから。いい作品はね、難しくないんだよ。ちつとも。頭でぎくんじやないんだなあ。胸で味わうんだなあ。
妻　　ほんとですか。
夫　　ほんとだつて。まちがいないつて。
妻　　感動する？
夫　　びっくりするよ。
妻　　じゃ一応了解することにする。
夫　　そう？
妻　　そうする。

夫、自分のシャツの中に懐中電灯を入れて、間を測る。

夫
いい？

妻
いいですよ。

夫
ちゃんと緊張してなきゃだめだよ。
妻
緊張してます。

夫の懐中電灯の動きが止まる。

夫
……やまのはし。
妻
……。

夫の懐中電灯が少し動く。

妻
はい。

夫
あードキドキする。

妻
終りですか。

夫
まだだよ。まだ始まったばかりじゃないの。

妻
そうなんですか。

夫
なんのことかわからないでしょ、それで終わったんじや。

妻
私、そういうものかと思いました。よく知らないから。

夫
いくよ。

妻
はい。

夫の懐中電灯が止まる。

夫
……くものはし。

妻
はい。

夫
……ゆびのはし。

妻
はい。

夫の懐中電灯が少し動く。

妻
……。

夫
終わったよ。

妻
そうなんですか。

夫
……。

妻
……はい。

夫の懐中電灯はシャツの中でぐわぐわ動き始める。

妻 …ほらあ。
 夫 なに。
 妻 わかんない。ちつとも。
 夫 わかんない？
 妻 それに数が足りないみたいだし。
 夫 数？
 妻 文字の数。
 夫 だから自由律なんだつて。
 妻 あ、そうなんだ。
 夫 五、七、五じゃないんだよ。
 妻 季語は？
 夫 季語？
 妻 それもないんですか。自由律つて。
 夫 どうだろう。
 妻 俳句だったら季語は必要じゃないんですか。季語がないのは川柳、つていうんですよ。
 夫 くわしいね、お宅。
 妻 でもそうでしょ。季語は？ゆび、ですか。
 夫 ゆびつて、なんの季語だよ。春？秋？冬？
 妻 春。
 夫 どうして。
 妻 くわえるから。
 夫 春に？
 妻 そう。
 夫 指つて春にくわえるのか。
 妻 なんとなく。
 夫 指つて冬にはくわえないのか？
 妻 くわえない。
 夫 おまえは絶対冬に指くわえないか。
 妻 私は指なんてくわえませんよ。年中通して。
 夫 じゃどうして春なんだよ。
 妻 知りませんよ。昔の人が決めたんだから。
 夫 いつ。
 妻 昔の人だから、最近、つてことはないでしょう。
 夫 わからんなあ。
 妻 きつと昔はほら、貧しいから、春になったらもうお米の蓄えがなくなるんですよ。だから、ああ、世間は
 指をくわえる季節になったことよなあ、つて詠嘆したりするんですよ。
 夫 せちがらい季語だね。
 妻 なったのではないか、いやそうなのではない。
 夫 ……。

妻、懐中電灯で夫の顔を照らす。表情をうかがうと、すぐ足元に向け直す。

妻　ちがいますよね。季語はないんですよね。自由だから。川柳なんだ。自由律川柳。

夫　……なんだか値打ちがないみたいに聞こえる。

妻　あらでも立派なもんですよ。

夫　そうかな。

妻　そうじゃないんですか。

夫　……。

妻　ほらあ。だから、がっかりするっ。

夫　今朝の風景を詠んだんだよ。

妻　今朝ですか。

夫　きみは寝てたでしょ。

妻　そうでした？

夫　寝てた寝てた。僕は起きてたんだよ。だから知ってる。

妻　そうでしたっけ。

夫　朝焼けがきれいでね。皆輝いてた。山の端は白く、雲の端は黄色から赤やら青やらのグラデーションで。

指をその遠い風景にかざしてみた。そうするとその指まで輝いてみえた。白く。

妻　へえ。

夫　感動したんだ。きれいでね。

夫、懐中電灯を消す。妻も消す。

夫　やまのはし、くものはし、ゆびのはし。

妻　……眠らなかつたんですか、また。

夫、懐中電灯を点ける。

妻　泣いたって、子供の命は返ってきませんよ。

夫、懐中電灯を消す。

夫　こんな感じだ。

妻　え？

夫、懐中電灯を点ける。

夫　こんな感じ、ほら。

夫、懐中電灯を消す。

夫　ね。ほら。

夫、懐中電灯を点ける。

夫　やってーらん。ほら。

夫、懐中電灯を消す。妻も懐中電灯を自分のシャツの中にいれる。それを点けたり、消したりをしながら、

妻　起してくれたらいいのに。

夫　起こせないよ。

妻　どうして。

夫　寝顔を見てたんだよ。

妻　私の？

夫　そうだよ。

懐中電灯は点いたり、消えたり。

妻　どうでした？

夫　なにが。

妻　私の寝顔。

夫　きれいだったよ。輝いてたよ。

妻、立ち上がる。そのあたりをうろうろと歩き回る。夫も立ち上がる。妻の懐中電灯が消える。

妻　ありがとう。

夫の懐中電灯だけがそのあたりをうろうろして、
暗転。

暗転中、中川の声がする。

中川　ぶるるるるるるるる。

しばらくして、男は闇の中、部屋の中央に移動したようだ。あかりをつける。中央に第1場と同じようなテーブルがある。その上にのる。

馬になろう、とするが、ちよūdい具合の視界が見つけられない。ひとまわりしてしまう。暑い。服をぬぐ。パンツいつちようになる。

中川　ぶるるるる、

うまくいかない。暑い。おりて、センスをカバンから取りだし、あおぎながら、もう一回、馬になろうとした。その時、別の男（村井）が入場する。

部屋の端に立つてぼんやりと中川を見ている。

村井　……。

かばんをおろし、台所のほうに消える。

中川　え。

中川、テーブルからおり、正座する。まずいところを見られた、と感じている。

自分のかばんから本を取り出し、なにげなく読もうとする。もちろん、ふり、だ。

村井、入ってくる。手にジュースのペットボトルとコップ二つ。座る。コップにジュースを注ぐ。

中川　ん。（とせきばらい）

村井　……。 （コップを見ている）

中川　おい。

村井　ん。

中川　……。

村井　なんちゅう格好だ、それは。

中川　え。

村井、飲む。

村井　ぬるいな。

中川　え。

村井　ぬるいよ、このジュース。

村井、横になる。深く呼吸している。

中川 おい。

村井 んー？

中川 ……こんばんは。

村井 ……服着ろよ。ド迫力だなあ。

中川 ド迫力？

村井 今だれかはいってきたら、どうする。おれはいやだよ。誤解されて。ないからね、そういうシユミ。

中川 シユミ？

村井 ……はあー。…ふうー。

村井の呼吸は次第にラクになってきたようだ。

中川 だれが入ってくるんだよ。こんな時間に。

村井 おれ。

中川 へ。

村井 例えば、おれ、です。……ひひ。

起き上がってテレて笑ったかと思うとまた村井、台所にきえる。

中川、村井のコップのジュースを飲み干す。

村井の声 なにい。

中川 え。

村井の声 食うものないの？

中川 え。

村井の声 イミを失ったレイソウコだな、全く。

中川 ……あのなあ、おまえ。

中川、台所に行きかけると村井登場。鉢合わせ。

村井 まいった。

中川 へ？

村井 まいった。まいる。いったいどうしちゃったんだろ。ね。

中川 へ？

村井 ひひ。

村井、テーブルに行き、座る。深く呼吸。

村井 ……ラクになってきた。

中川 へ。

村井、中川に少し笑いかけて、コップでジュースを飲もうとするが、ない。

村井 もう。なに。ナカガワ。

中川 へ。

村井 なんだよ。おまえ。自分のを使えよ。せつかく出してきてやったのに。ナカガワ。

中川 はい。

村井 こっちがおまえの。

村井、二つのコップにジュースを入れる。

村井 ナカガワ。

中川 はい。

村井 これで飲む。

村井、飲む。深く呼吸。上半身の服を脱ぐ。

村井 なるほど。あつつい。たまらん部屋なんだ。こっちは。な。

村井、横になる。目をつぶる。深く呼吸。

中川、村井に近づく。

村井 よしよし……いいぞ。いいぞ。

中川 ムライ。

村井 んー？

中川 村井。

村井 うわっ。なに。バカ。おまえ。

中川 え。

村井 気持ち悪いよ。バカ。近寄るなよ。

中川 バカあ？

村井 なに。用事は。

中川 用事……あのなあ。

村井 なに。

中川 帰れよ。暑かったら。クーラーあるんだろ、おまえの部屋。

村井 あるよ。

中川 食うもんだって、あるんだろ。

村井 あるよ。

中川 な。

村井 ……それがさ、困ったもんなのよ。

中川 へ？

村井 俺はどうしちゃったんだろか、てこのよ。
中川 へ。

村井 ふうーうーうーう。〔横になる〕

中川 なんだよ。

村井 なにが。

中川 用事はなに。

村井 ないんだなあ、それが。

中川 なんだそれ。

村井 なんだそれは辛いなあ。俺、おまえに会えてうれしいんだよ。うれしい。感謝してる。おまえはどう？
うれしくない？

中川 うれしい？

村井 ……うれしくないよねえ。そりやそうだよねえ。

中川 へ……。

村井 はあー。

中川 なに。

村井 いや。泣けてきた。

中川 え。

村井 ごめん。ちょっと泣かせて。

中川 え？

村井 ……。

村井がしゃくりあげる気配がする。

中川 おい。おい。

村井 ごめん。ごめん。ちょっとだけ。

中川 あ……

村井 ……（しゃくりあげるようだ）

中川 うれしいよ。

村井 ……ほんと？

中川 ……ほんと。

村井 感謝してる？

中川 感謝？

村井 ……しないよねえ。……はあー。

中川 なに。なにに。

村井 ごめん。ごめん。いかなあ、こーいうこころは迷惑をかけるばかりではないか。（起き上がる）……ん
I。

村井、ジュースを飲む。

村井 ぬるいなあ、こいつ。

中川 ……あのなあ。だれのジュースに文句言ってるんだよ。

村井 おれのだよ。

中川 へ。

村井 俺のじゃない。おとつい、買って来て、冷蔵庫に入れ
た。

中川 へ。

村井 だろ。

中川 だっけ。

村井 だよ。だから盛大に文句を言ってもよろしい。

村井、ジュースを飲む。

村井 めるいぞ、こいつは。全く。……まあ、飲めや。

中川 ……うん。

村井 遠慮するなや。

中川 ……。

中川、ジュースを飲む。

村井 どうして泣くの。

中川 え。

村井 どうして泣く？

中川 え。

村井 はあ！

中川 泣いてないよ。

村井 え。

中川 別に泣いてたんじゃないよ。

村井 へ？

中川 ……へ？

村井 ……なに？

中川 え、いや。あの。

村井 泣いてたの。

中川 おれにきいたんだろ？

村井 そうだよ。

中川 どうして泣くの、って。

村井 人はどうして泣くのだろうか、って。

中川 え。…あ、そう。…そう、ですか。

村井 なに、おまえ。泣いてたの。

中川 だから。泣いてないって。

村井 なになに。どうしてどうして。

中川 どうしてでもないって。泣いてないんだって。
村井 どうしてどうしてどうして。あー、俺、今そういう話とつてもききたい。
中川 泣いてないって。泣いてない。うるさいよおまえ。
村井 ……むきになるなよ。あーあ。

村井、横になる。

中川 しつこいからだよ。

村井 よけいあやしいよ。

中川 あ……。

村井 俺は、だめだ。

中川 へ？

村井 意味もなく、コドクだ。

中川 コドク？

村井 胸が苦しい。心臓の鼓動が早くなる。呼吸ができない。突然だ。それくらいのコドク。

中川 なにそれ。病気か。心臓の。

村井 ちがうよ。

中川 いつから。

村井 就職してから。よくそうなるのは。夕方5時半で仕事が終わる。帰る。メシ食いにいって、帰って、7時半だ。することがない。横になる。最初はTVでもつければなんでもなかった。でも最近はだめだ。

中川 医者行けよ。心臓の。

村井、起き上がる。

村井 心臓じゃないんだよ。ひとりで、やることがなくて、時間が有り余るときに、寂しくなって、そういうときだけだもん。休みの日がこわい。

中川 ほお。

村井 一人じゃ眠れないから、今日は泊まる。

中川 なにそれ。要するに、寂しい、ってことか。

村井 ……泣いてたくせに。

村井、横になる。

中川 泣いてないっ……。

村井 だめだ。死ぬかもしれない。

中川 ……。

村井、下半身の服も脱ぐ。パンツ一丁だ。

村井 あっちい。

中川 うん。

中川、センスで自分をあおぐ。やめて、村井をあおぐ。

中川 死ぬのか。

村井 ……人はいつか死ぬ。

村井、中川のセンスを奪う。

村井 あのなあ。

中川 はい。

村井 そうだよ。さみしいってことだよ。

中川 はい。

村井 だけどそれが呼吸をとめるんだ。

村井、横になる。

村井 お前の話も聞いてやるよ。

中川 いいよ。

村井 話してくれよ。

中川 ……泣いてないんだって。

暗転。

第五場 トモヨの職場

仕事着のトモヨ、大きな机のある部屋で、大きな紙を丸めた筒状のものを五・六本、脇に抱えている。

トモヨ うりやつ。

そのうちの一つを勢いよく目の前で広げる。その拍子に脇の下に挟んでいた筒状の紙がバラバラと床にこぼれる。

トモヨ あーあー。

拾い上げようと床にしゃがむトモヨ。そこへ同僚の男（早川）が入ってくる。背広姿。

早川 飯田さん。

トモヨ あ、おはようございます。

早川 休憩？

トモヨ 休憩じゃありませんよ。

早川 こんな別室にとじこもっちゃって。くつろいで。

トモヨ お仕事ですって。くつろぎません、朝っぱらから。

早川 そりゃそうか。（あくびをかみころしている）

トモヨ 今出勤ですか。

早川 ……ま、いいじゃないですか。

トモヨ 重役だ。

早川 ……。

トモヨ、別の筒状の紙を広げるなどの作業をしている。

早川 いいなあ、休憩なんて。

早川、去る。

トモヨ 休憩じゃありませんって。……ったく。……整備計画図、ちがう。……地域計画図、ちがう。

一枚広げては手を離すと、紙は勝手に丸まってもとに戻ってゆく、という作業を続ける。

トモヨ 建設計画図、これだ。

探していた図面が見つかったらしい。机の上に広げる。紙を逆向きに丸めようとするとところへ、先ほどの早川が戻って来る。お面をかぶっている。両手にコーヒークップを持っている。

トモヨ あ。

早川 早川です。

トモヨ ……。

早川 スチャラカ社員です。

早川、紙を広げ、その両端をコーヒークップでおさえる。座る。

早川 今日、係長と課長、出張でしょう。

トモヨ はい。

早川 だから無法地帯なんだよ。

トモヨ、色鉛筆で作業にとりかかる。

早川 コーヒーでよかったよね。

トモヨ はい？

早川 つたつて、給湯室には紅茶なんてないんだよね。

早川、 コーヒーを飲もうとする。当然面がじやまで飲めない。

早川 おつとつと。……なんつって。

トモヨ ……。

早川、 面をとる。 コーヒーをすすする。

早川 ……目が覚めるねえ。

トモヨ もう九時ですから。

早川、 机につつぷす。

早川 やっぱり眠いわ。

トモヨ、 コーヒーを飲む。受け皿と持ち上げたので紙が丸まる。慌てて受け皿でおさえる。目覚める早川。
仕事を続けるトモヨ。

早川 飯田さあん。

トモヨ ……。

早川 飯田さあん。

トモヨ ……。

早川 休憩しようよ。

トモヨ、無視して仕事を続ける。

早川 コチヨコチヨコチヨ。

口先だけで動作は伴わないのに、トモヨ、少しびっくりして反応してしまう。

早川 休憩しよ？

トモヨ 午前中が締切りですから。

早川 なに？色塗り？

トモヨ 係長と課長、午後には出てくるでしょう。

早川 え。ほんと。

早川、立つ。

早川 ……ま、いいかあ。いいやねえ。……

早川、コーヒーをすすする。

早川 業者がさ、遅れてるんだよ。コピー用紙きたぞ、って連絡したのに。だから今日お仕事にならないや。
トモヨ はいはい。

早川 時々村井、ていうのが来るでしょ。業者に人手がない時に、運送の応援させられて。いちおう零細でも
商社マンなのに、新人だから「いけえ」って、ファシズムだね。

トモヨ そうですね。

早川 俺は民主主義が好きだよ。「いけえ」「ねますう」(寝る) ……今日は多分あいつが届けにくるはずなんだ
よ、遅刻しやがって。

トモヨ 遅刻はいけませんね。

早川 ……知り合いでしょ。

トモヨ だれ。

早川 村井君。

トモヨ 一応。

早川 紹介してもらったんだって？あいつに。彼氏を。

トモヨ 紹介っていうか。

早川 イイオトコ？

トモヨ だれ。

早川 彼氏。

トモヨ さあ。

早川 村井とどっちがいい？

トモヨ 村井君は対象にならないっていうか。

早川 俺は？

トモヨ へ？

早川 俺は対象になる？

トモヨ ……妻子を捨てたら。

早川 捨てる捨てる。

トモヨ ……。

早川、面をさしだして、

早川 かぶってみる？これ。

トモヨ けっこうです。

早川 どうして。かぶってみなさいよ。楽しいよ。

トモヨ　楽しくないですよ。

早川　そうかなあ。

早川、かぶる。

早川　こんなに楽しい。

トモヨ　……。

早川　踊ったりして。

早川、踊る。

トモヨ　寝てないんですか。

早川、踊り続けている。トモヨ、気になる。

トモヨ　早川さん。

早川　……そうなんだよ。

早川、座る。

早川　ホテルだよ。

トモヨ　ホテル？

早川　こんな季節になあ。

トモヨ　いませんよ。今頃。

早川　いるんだよ、うちにはさ。

トモヨ　飼ってるんですか。

早川　そうだよ。ペランダにさ。

トモヨ　へえ。

早川　俺のことだよ。

トモヨ　なに？

早川　飲まないの。

トモヨ　いえ。

早川　飲みなさいよ。

トモヨ、コーヒーをすする。

早川　妻と会話がなくてね。

トモヨ　へ。

早川　どうしてだろうね。いつの間にか、だね。口きくのが面倒になっちゃった。俺が先だった。
トモヨ　はあ。

早川 妻にうつっちゃってね。生返事。うちでは家庭中がもう、生返事と生返事の応酬。いかんなあ、って焦るようになった。どのくらい前からだろう。焦ったから、昨日の晩はついに押し倒した。最大のコミュニケーションションだからね。

トモヨ そんなもんですか。

早川 そんなもんだよ。そしたら蹴られた。股間を蹴られた。のたうちまわる私をよそ目に妻はのしのしと台所に去った。冷蔵庫を開けて、どうしたと思う？

トモヨ さあ。

早川 缶ビールを開けた。どうしたと思う？

トモヨ 飲んだ。

早川 ちがう。またのしのしと歩いた。どこへ？

トモヨ さあ。

早川 トイレじゃないんだよ。妻はオシッコを寝る前にすます女だから。

トモヨ 知りませんよ。

早川 規則正しい女なんだなあ。昔ヤンキーだったくせに。

トモヨ 知りませんって。

早川 こつちへ来る。

トモヨ はい。

早川 どうしたと思う？

トモヨ 飲んだ。

早川 かけた。

トモヨ なにを。

早川 ビールを。

トモヨ どこに。

早川 どこでしょう。

トモヨ 知りませんって。

早川 植木じゃないんだよ。寝室に植木なんて置かないんだから、
たいていの人は。

トモヨ 知りませんよ。

早川 私にかけたんだよ。

トモヨ ビールを。

早川 ビールだよ。はじめはわからなかったよ。髪の毛が重くなったなあ、と思っただけ。しばらくすると頭皮に冷たさを感じられた。もうしばらくすると、匂いがした。のたうちまわりながら私はビールの匂いを感じていた。泣くに泣けない。泣けないのにビールが目にしみる。布団はビチヨビチヨ。涙だかビールだか、わけわからない。

トモヨ ……。

早川 股間の痛みが去った頃、妻はすでに隣で寝息を立ててたね。私は布団の上に起き直ると彼女の後ろ頭を眺めた。さてどうしよう。どうする？

トモヨ わかりません。

早川 言ってみてよ。なにか。

トモヨ 寝る。

早川 寝られない。髪の毛グシグシだよ。乾いたらコテコテになるんだなあ。あれは。
トモヨ そうなんですか。

早川 かけられた人しか知らないんだなあ。そういうことは。

トモヨ そりゃそうでしょ。

早川 シャワーを浴びることにしよう。あつついお湯がいいよ。あつついお湯が頬をつたう。目にしみたビールが流れてつたう。しゃくりあげてたね。私は。あがつて鏡を見たら、ビールと涙で白目がまっ赤だった。今でも赤いよ。ほら。

トモヨ ほんと？

トモヨ、顔を早川に近づける。

早川 チュウ。

口先だけなのに、またしてもトモヨ、反応してしまう。早川、コーヒーをすすろうとする。

早川 おつとつと。

トモヨ ……。

早川 一晩中ベランダでタバコすったよ。向かいも同じマンションでね、十一階建ての。八階か七階にもホテルちゃんがいたよ。なんだか仲間意識みたいなのがムラムラとこみあげてきてね、手を振ってやった。そして、どうしたと思う。そいつ。

トモヨ 手を振った。

早川 おー。

トモヨ なに。

早川 初めて正解しましたね、飯田選手。こぼうびに日曜日、デ

ートしてあげよう。

トモヨ え？

早川 私、テレくさくなってね。わざと背中を向けたりして。しばらくしてふりかえるとそいつ、また手を振る。しかたないから少し手を振ってやった。そいつは手を振るのをやめる。なん分かしたら今度は私が手を振る。少しだ。そいつも手を振る。少しだ。またなん分かしたら今度は……

トモヨ 朝まで？

早川 明るくなったら私はベランダで寝てましたね。そいつはいなかった。

トモヨ そうですか。

早川 飯田さんだって、眠れない夜があるでしょ。

トモヨ え。

早川 俺にはわかるよ。

トモヨ え……。

早川、コーヒーを飲む。面を上げて。少しだけ。

早川 あれ。

早川、立つ。出口の方へ進む。

早川　気配がすると思ったら、

早川、面を内ポケットに隠して、

早川　飲んで。

トモヨ　え。

早川　早く飲んで。

トモヨ　どうして。

早川　いいから。

早川、出口の外を気にする。トモヨ、飲む。

早川　帰ってきたよ、課長が。どうしてまた。

トモヨ、飲む。

早川　村井のバカ、コピー用紙持つてこいよ。叱られちゃうよ。

トモヨ、飲み干す。早川にコーヒーカップを手渡す。早川、去りかけて、

早川　ごほうび。

トモヨ　え。

早川　日曜日、朝十一時。どこがいい。

トモヨ　日曜日？

早川　海でも行くか、山がいいか。飯田さん、最寄りの駅はどこだっけ。

トモヨ　梅ヶ丘ですけど。

早川　じゃそこ。改札口は一つ？

トモヨ　はい。

早川　十一時。な。

トモヨ　え。早川さん。

早川　用事あった？

トモヨ　別にないですけど。

早川　よっしゃ。

早川、去る。トモヨ、立つ。

トモヨ　あの……。

トモヨ、座る。紙が丸まってしまっている。手で広げる。紙はゆっくりまた丸まってしまふ。早川、再び入つてくる。

早川 飯田さん。

トモヨ はい。

早川、手を振る。トモヨに。

トモヨ え。

早川、面を被る。トモヨに手を振る。

トモヨ ……。

トモヨも手を振る。早川の手を振る目標は次第に曖昧になるようだ。

舞台中央の空間にいる中川も手を振っている。照

明はその中川のいる空間の方が明るくなり、

職場の空間は暗転する。

第六場 蛍のいない川辺

夫、登場。立っている。シャツのおなかに懐中電灯を入れて、手を振る中川を見ている。

やがて中川の部屋を含む全空間が暗転する。夫のおなかの懐中電灯が点いたり消えたりしているのだけが残る。

妻が入場。シャツのおなかに入れた懐中電灯が点いたり、消えたり、を夫と同時に言う。

妻 ちがいますよ。

夫 ……。

妻 もっとやさしく点くし、もっとやさしく消えますよ。蛍は。

夫 そうかな。

妻 そうですよ。こんな感じじゃないですよ。

夫 うん。

妻 ……帰りましょう。

夫 うん。

夫、妻、その場にしゃがむ。おなかの懐中電灯はついたり消えたりする。中川の部屋の明りがつくと、その明滅はかき消される。

中川は立っている。手を振るのを終えたようだ。

第七場 朝の中川の部屋

寝ていた村井が目を覚ます。

村井 ん。

中川 ああ。

村井 ……なにやってるの。

中川 あれ。

村井 なに。

中川 なんでもないよ。

村井 ……また。

中川 なんでもないって。

村井 ……いいけど、別に。

村井、腕時計を見る。

村井 え。……え、

村井、起き上がる。

村井 うわあーっ。なんじゃあこらあ。

村井、台所のほうへ慌てて去る。

中川 ……目覚まし、かけとけよ。

中川、横になる。眠りの続きを貪ろうとする。

村井の声 中川、中川。

村井、出てくる。顔が濡れている。

村井 中川。

中川 ……。

村井 タオル。どこ。タオルどこ。

中川 んー。

中川、適当にそのあたりに落ちている布きれを手渡す。村井、退場。

村井の声 遅刻も遅刻、大遅刻ではないか、この、……くせえつ。

村井、出てくる。

村井 バカ、中川、おまえ。

中川 ……なに。

村井 くせえんだよ、おまえのは。バカ。

村井、中川に先ほどの布を投げる。村井、退場。

中川 あ、シャツだ。

村井の声 汗が腐って、酸の匂い。化学薬品、だよ。

中川 硫酸？

村井の声 酢酸。

中川、匂いを嗅ぐ。

中川 あー。お酢。なるほど。

ノックの音がする。二度、三度。

中川 はい。

中川、出てゆく。そのシャツを胸の前におしあてながら。村井、入場。

村井 ネクタイ、ネクタイ。

自分のカバンを探っていると、中川、入場。

村井 ネクタイしめて走ると、これがまた汗をかくんだよね。

中川 ……けど人が来てるんだよ。

村井 え。

見ると、そこに女の子（めぐみ）が立っている。

村井 あ……。

めぐみ こんにちは。

村井 ……こんにちは。

めぐみ おじやします。

村井 どうも。

めぐみ、座る。

村井 ……だれ？

中川 こちら、石井めぐみさん。

村井 あ、そう。

めぐみ 服、着てください。

村井 は。

めぐみ 服。

めぐみ、退場。台所へ。村井、大慌てで服を着る。

村井 バカ、おまえ。

中川 なに。

村井 服着ろよバカ。

中川 いいよ別に。

村井 よくないよバカ。

中川 ……。

中川も服を着始める。

村井 だれ？

中川 だから、石井めぐみさん。

村井 だから、おまえのなに。

中川 んーと、
めぐみ 教え子です。
村井 うわっ。

めぐみ、コップ三個を持って立っていた。

村井 ……教え子？

めぐみ ひわいだなあ。

村井 え？

めぐみ、去る。台所へ。

村井 見ろ、バカ。

中川 なにが。

村井 誤解されたら、おまえのせい。

中川 おれのせい？

村井 あーもう。行かなきゃならないのに。

中川 行けよ。

村井 行けないだろ。

中川 どうして。

村井 誤解を解かなきゃ行けない。

中川 いいよ、そんなのは。

村井 よくないよ。

中川 いいよ。

村井 よくない。俺がよくない。

中川 いいよ。ほんとに。

村井 よくない。ほんとに。

めぐみ いいですよ。ほんとに。

村井 うわっ。

めぐみ、入ってきていた。ジュースのペットボトルを持って。

村井 いいって？

めぐみ 中川先生は多数派の男性ですから。私は知ってますから

村井 多数派？

めぐみ 異性愛愛好者。

村井 はあ。

めぐみ、ジュースをコップに注ぐ。

村井 教え子ってなに。

中川 ドイツ語。

村井 ドイツ語？

中川 教わりたい、っていうから。

村井 おまえが、ドイツ語？

中川 だって教わりたいうて言うんだから。

村井 ええ？

めぐみ うち、短大だから、第二外国語ないんですよ。つまなくて。

村井 はあ。

めぐみ お母さんも教わりなさい、っていうから、ね。いいバイトなんだよね。中川先生にも。

村井 おまえが、ドイツ語。

中川 過去形くらいまでなら知ってる。

村井 ドイツ語に過去形なんてあったっけか。

中川 あるよ。

村井 アイン、ツバイ、ドライ、

めぐみ どうぞ。

村井 あ。

めぐみ、ジュースを飲む。

めぐみ ぬるいなあ。

村井 え。

めぐみ このジュース。

中川 ……。

めぐみ でも冷えててもおいしくないか、このジュースなら。

中川 他人のジュースに文句言うな。

めぐみ 私のだよ。

村井 え。

めぐみ 私の。

中川 え。

めぐみ 私が買ってきて、入れといたんじゃない。冷蔵庫に。

村井 え。

中川 そうなの。

めぐみ そうだよ。

村井 そうだっけ。

めぐみ そう。だから盛大に文句を言ってもよろしい。ぬるいぞ、全く、こいつ。

中川 なんだよ。

村井 あれ、そうだっけ。

中川 いかげんなやつだな。

めぐみ なに。

中川 いや、別に。
村井 ……あれえ。

村井 ジュースを飲む。

村井 ぬるい。

中川 なに、用事は。

めぐみ ないよ。別に。

中川 なんだそれ。

めぐみ なんだそれはないでしょう。用事がなかったら来ちゃいけないの？そうなの？

中川 え？

めぐみ そうなの？

中川 いや。

めぐみ 私、先生に会えて嬉しいんだよ。とつても。先生もそうでしょ。

中川 ……まあ、そう、かな。

めぐみ ほら。ね。

めぐみ、ジュースを飲む。

めぐみ ピアノが聞こえてたよ。来る途中で。

中川 そう。

めぐみ マーラーだった。暑苦しい曲。

中川 マーラーって、暑苦しいのか。

めぐみ うん。特別。でもピアノってだいたいが暑苦しいよね。ひいてても暑苦しい。

村井 ピアノひくんですか。

めぐみ はい。四才から習ってます。

村井 そりゃすごい。

めぐみ すごくないですよ。全然。指が短いから、全然。ほら。

めぐみ、村井に指を広げて見せる。

村井 ……。

村井はじきどきする。

中川 おい。

村井 うん。

中川 いいのか、時間。

村井 あ……うん。

中川 ほら。

村井 ……うん、うん。

めぐみ でね。

村井 はい。

めぐみ 犬がね、ほえるの。

村井 イヌ？

めぐみ ピアノの曲に合わせてね、犬が吠えるのよ。そこのおうちの。

中川 あ、そう。

めぐみ 暑苦しいったらないのよ。だから、一層。

中川 そう。

めぐみ 私、犬嫌い。

中川 うん。

めぐみ でも猫は好き。

中川 そう。

めぐみ 犬って散歩すると機嫌いいでしょ。一日中鎖につながれてるくせに、散歩さえしてもらってたら郵便配達の人に吠えたりしないでずっと機嫌よく寝てる。そうやって機嫌よく一生過ごす。朝散歩して、昼寝で、夕方寝て、夜寝て、朝散歩して、昼寝で、夕方寝て、夜寝て、朝散歩して、

中川 それで？

めぐみ だから嫌い。

中川 そう。

めぐみ でも猫は好き。

中川 ふーん。

めぐみ 先生、今日はおうちに来て。

中川 ええ。

めぐみ うちの猫、さわりにきて。

中川 どうして。

めぐみ だって私、猫、すきだもん。先生も好きでしょ？

中川 え。そうかな。

めぐみ 私、先に帰って待ってるから。

中川 だめだよ、今日は、

めぐみ 忙しい？

中川 忙しくないけど。

めぐみ だったらお母さんも待ってるから。

中川 ああ、あのなあ。

めぐみ、コップとジュースを持って台所に去る。

村井 ……。

中川 おい、おまえ。

村井 ん。

中川 時間は。
村井 いや、いい。
中川 なにがいいんだよ。
村井 だってほら。
中川 なに。
村井 ……。
中川 なに。
村井 ……。

めぐみ、あらわれる。

めぐみ だってこの部屋、暑いんだもん。

めぐみ、去りかけて、

村井 馬は。

めぐみ え。

村井 馬は好き？

めぐみ ……きらい。

めぐみ、退場。

中川 なんだよ馬って。

村井 ……きらいだって。

中川 なんだよ。

村井 はあー。

村井、ジュースを飲む。めぐみの去った方を見て、

村井 太いなあ。

中川 え？

村井 太いよ。

中川 そうだよ。

村井 はあー。

中川 なに。

村井 いや。太いのはどうなんだろうか、と思つて。

中川 あんなもんじゃないの。短大生なんだから。

村井 短大生っていうのは太いのか。

中川 しらない。

村井 太くないと短大生とはいわないのか。

中川 知らないって。

村井 短大生にもいろいろあるよ。種類が。太いのとか細いのとか高いのとか低いのとか、黄色とか紫とかぐんじょう色とか真っ赤とか。

中川 なんだそれ。

村井 種類がさ。

中川 ぐんじょう色の短大生。

村井 短大生だよ。……短大生でえす。だげどぐんじょう色でえす。……な。短大生でえす。そして、真っ赤でえす！……な。

中川 知らないよ。

村井 床にうつぶせにのびる。泳ぐ。

村井 サラリーマンでえす。……だから、黄色でえす。

中川 ……。

村井 起き上がる。

村井 俺、久しぶりにどきどきした。

中川 そう？

村井 なに。どうしたの。

中川 なにが。

村井 きっかけ。

中川 学祭。後輩の出店手伝ってたら、客で来た。

村井 暇だね。

中川 らしいよ。

村井 おまえだよ。いいのか、そんなので。留年生。

中川 ……暇なんだよ。でなきゃいけない授業なんか残り少ないし。

村井 困ったもんだね。親が泣く。

中川 やってるよ。ちゃんと。

村井 就職活動。

中川 ……。

村井 服を脱ぎ始める。

中川 おい。おい。

村井 んー？

中川 時間。仕事は。

村井 だってこの部屋、アツインダモン。

めぐみの口真似。

中川 ……大きな家でね。両親が愛し合ってるんだって。犬が好き、猫きらい、ピアノ好き、バイオリン嫌い、ケーキ好き、漬物きらい、シンプルなお嬢様。

村井 そうだろう。

中川 だけどそうでもないんだよ。

村井 なに。

中川 あの母はさ、俺に迫るんだよ。

村井 え。

中川 そうなんだよ。

村井 おおお。

中川 そうなんだよ。

村井 ……。

中川 ……。

村井 ぐんじよう色でえす。

中川 え？

村井、床にうつぶせになる。

村井 黄色でえす。

中川 ……。

中川、ジュースを飲む。村井、テーブルの上に立つ。

村井 ぶるるるる……

中川 なに。

村井 太いのつて、いいなあ。

中川 え。

村井 ……ぐんじよう色だね。フクザツだね。

中川 ……。

村井 おまえのことだよ。キシシシ。……いいなあ。

中川 おちつけよ。

村井 おまえが落ち着けよ。

中川 俺は、いいんだよ。

村井 なに。

中川 いらない。ああいうのは。

村井 ぐんじよう色。

中川 え？

村井 ぶるるるる……

中川、ジュースをのみ、村井を見上げる。暗転。

第八場 梅ヶ丘駅前の喫茶店

向かい合わせにトモヨ、早川が座っている。

トモヨの前にはコーヒー、早川の前には大きなバナナジュース。にやにやしている早川、居心地悪そうなた
モヨ。

早川　ほんとに来たねえ。

トモヨ　え？

早川　しかも5分前に。

トモヨ　え？

早川　しかもおしやれして。

早川、ジュースをすする。

トモヨ　きますよ。そりゃ。

早川　どうして。

トモヨ　どうしてって。

早川　だって、どうしてなんだろう。

トモヨ　しかたないでしょう。

早川　そうなの？

トモヨ　そうなのって。

早川　いやあ。来るとは思わなかった。

トモヨ、コーヒーを飲む。

トモヨ　帰りましょうか。

早川　帰らなくってもいいよ。

トモヨ　来ないだろうと思ってるのに来たんですか？

早川　そう。

トモヨ 来なかったらどうしてたんですか？

早川 来なかったら、来なかったなあ、と思ってただろうね。

トモヨ 思って、どうしてました？

早川 思って、思ってた。

トモヨ 答えになってない。

早川 いつもと同じだよ。駅前の喫茶店でも入って、女の子でも眺めて、ぼやーとする。

トモヨ いつもそんなのですか？

早川 そうだよ。

トモヨ 日曜日？いつも？

早川 そうだねえ。

トモヨ 楽しいですか。

早川 楽しいわけないねえ。

トモヨ ：今も同じですね。結局。

早川 そうだねえ。駅前の喫茶店でも入って、女の子でも眺めて、ぼやーとしてる。ただ今日はその女の子がもう目の至近距離

だ。至近距離で眺めてるんだもんね。

トモヨ 楽しくないですねえ。

早川 そんなことないさ。今日の僕は楽しいよ。

トモヨ そうですか。

早川 ほんとだよ。うれしいよ。ほら。

早川 背広のポケットに手を入れて鳥のように羽ばたかせ始める。

トモヨ わかりました。

早川 やめない。腰まで浮いてきた。

トモヨ ジュース、ひっくり返しますよ。

早川 やめない。

早川 こんにちは、う、れ、し。

トモヨ 早川さん。

早川、羽ばたくのをやめる。

早川 飯田さんは？

トモヨ はい？

早川 うれしい？

トモヨ ……。

トモヨ、コーヒーを飲む。

早川 あ、うれしくないんだ。

トモヨ どうして背広なんですか。

早川 別に。意味ないよ。

トモヨ 休みの日なのに。リラックスしたらいいのに。

早川 面倒でしょ。

トモヨ 面倒。

早川 面倒だよ。リラックスは。

トモヨ はい。

早川 迷うじゃないか。リラックスは。で、責任がある。どんな服でも選んだ私がみられるってことでしょ。

気が重い。勇気がある。ちっともリラックスできない。その点このユニフォームは無責任じゃないか。

トモヨ おかしいですよ。

早川 ……責任感のカタマリ。

トモヨ はい？

早川 その衣装。

早川、うれしくなってきた。羽ばたき始める。

トモヨ どこか行くんじゃないんですか。

早川 やめた。

トモヨ え。

早川 ここで話しようよ。

トモヨ 海とか、山とか、って言ってたじゃないですか。

早川 面倒だよ。

トモヨ また。

早川 面倒。ここに一日中いようよ。

トモヨ ここに？

早川 無責任でいいよ。ここは。

トモヨ 海とか山は責任があるんですか。

早川 あるよ。ほら。うみい。……露骨に楽しそうな環境が整ってしまつて、ここではもう露骨に楽しくなら

ないといけない、つて迫られるじゃないか。楽しくならないと欠陥を問われる。

トモヨ そうですか。

早川 ここはいいよ。ほら。楽しくなりようがない。

トモヨ 一日中は無理でしょう。

早川 だいたいコーヒー3杯で5時間はいられるよ。経験上。

トモヨ 一日中ここにいらっしゃるんですか。

早川 バナナジュースも水っぱいしね。ほら。

トモヨ けっこうです。

早川 飲む？

トモヨ けっこうですって。

早川 飲んでこらん。水っぱいから。

トモヨ いりませんよ。おいしくないんですよ。

早川 おいしくないよ。

トモヨ そういう勧め方はないでしょ。

早川 だってここまでおいしくないっていうのは、すごいよ。

トモヨ なおさらほしくない。

早川 残念だなあ。

早川、ジュースを飲む。

トモヨ 冷房が強い。

早川 回転を早くしたいんだね。駅前だから。

トモヨ 寒い。

早川 厚着して来なくちゃ。

トモヨ え？

早川、背広の胸をかきあわせる。

トモヨ 話題、ないですよ。

早川 ないねえ。

トモヨ ……。

早川 職場の話でもしようか。

トモヨ いやですよ。休みの日なのに。

早川 じやなにか話してよ。

トモヨ どうして。

早川 だって話したいんですよ。

トモヨ 私は別にどつちでも。

早川 じゃ本でも読もうか。雑誌。おいてあるから。

トモヨ いいですよ。どうしてわざわざ喫茶店まで来て。

早川 でも置いてあるよ。

トモヨ 置いてあったら読まなくちゃいけないんですか。

早川 そんなことないっていうのがいいところだねえ、ここ。実に無責任で。

トモヨ そうですか。

トモヨ、服の前をかきあわせる。

早川 でも話してるじゃない。

トモヨ え。

早川 話してるじゃない。さっきから。
トモヨ そうですけど。

早川 いい感じじゃないか。僕たちは。知らない人が見たらきつとつき合い始めたばかりの恋人同士に見えるよ。

トモヨ そうですか。

トモヨ、服の前をかきあわせる。

早川 僕は君のことが好きなんだよ。

トモヨ ありがとうございます。

早川 ほら。

トモヨ なに。

早川 恋人同士だ。

トモヨ ……。

トモヨ、コーヒーを飲む。

トモヨ どこが好きなんですか。

早川 うん。いい質問だ。雰囲気のある。

トモヨ は。

早川 顔。

トモヨ 顔？

早川 顔が好き。

トモヨ 私の。

早川 空いてるんだか空いてないんだかわからない目が好き。

トモヨ そうですか。

早川 髪が長かったらもつと好きだなあ。

トモヨ ……そうですか。

早川 かきあげられるくらい長いと最高だなあ。

トモヨ ……。

早川 キスしようか。

トモヨ え。

早川 キスしよう。

トモヨ どうしてですか。

早川 好きだからだよ。

トモヨ どこで。

早川 どこでもいい。ここでする。

トモヨ いやですよ。

早川 じゃ場所変えようか。

トモヨ そういうことじゃないでしょう。

早川　でもキスしたい。ほんとなんだよ。
トモヨ　なにが。

早川　好きなんだから。

トモヨ　早川さん。奥さんは。

早川　……面倒なんだよ。
トモヨ　は。

早川、トモヨのコーヒーを飲む。

早川　心のどこかに空白があるでしょ。

トモヨ　え。

早川　飯田さんの心の中。

トモヨ　え。

早川　僕の心の中にも。きつと職場の連中の心の中にも。この喫茶店の客の心の中にも。世界中の連中の心の中にも。

トモヨ　そうですか。

早川　あるんだよ。空白が。あなたはそれを埋めたいと思ってもがいている。妻ももがいている。でも僕は違っただよ。

トモヨ　はい。

早川　僕は面倒なんだよ。無責任でいることにしたんだよ。

トモヨ　……。

早川　飲んで。

トモヨ　はい。

トモヨ、コーヒーを飲む。

早川　間接キッス。

トモヨ　あ。

早川、立ち上がる。

トモヨ　あれ。

早川　しょんべん。長丁場だから。

トモヨ　はい。

早川　飯田さん。

トモヨ　はい。

早川　ぼくらはきつとそのうちちゃんとキスすると思うよ。

トモヨ　え。

早川　ラブホテルにも行くと思う。ゴテゴテした原色のシャンデリアのある部屋。
トモヨ　え。

早川 どうしてつてきかないの。

トモヨ ……どうして。

早川 君も僕のことを好きになるから。

早川、背広を鳥のように羽ばたかせながら、去る。

トモヨ 髪が長かったら、……

トモヨ、髪をかきあげようとする。途中で気がつき、やめる。コーヒーを飲む。それも途中で違和感を感じ、やめる。居心地悪く、そこに座るしかないのだ。暗転。

第九場 同じ梅ヶ丘駅前の喫茶店・同じ日の別の時間

テーブルを挟んで村井、めぐみが立っている。

村井 やあ。

めぐみ ……。

村井 いらっしゃい。

めぐみ ……。

村井 コーヒーでいいよね。それともなにか食べる？

めぐみ ……。

村井 僕はバナナジュースなんだ。まずくつてね。ここは特別。名物。飲んでみる？それにする？

めぐみ ……。

村井 あ、(そうか)

村井、めぐみに近寄り、椅子をひいてやる。座ってもらおうと。

めぐみ ……。

めぐみ、座らない。村井も困る。しかたないので椅子の背をつかんだままうなだれてしまう。

村井 あ、と。……コーヒー。ホットで。

店員に話しかけられたのだ。店員は立っている二人をいぶかしげに見て、去ったようだ。村井は困る。周囲の視線がささるるので、とりあえず自分の椅子に座る。めぐみは座らない。

村井 座ってよ。……とりあえず、座って。

めぐみ、動かない。

村井 頼むから。

めぐみ なんですか、今日は。

村井 え。

めぐみ なんの用事ですか。

村井 あ、まあ、とにかく座ってから。

めぐみ 言ってくれないと私座らない。

村井 え？

めぐみ、立っている。

村井 あ、勉強。ドイツ語の。方法について、思って。教えてあげよう。

めぐみ、座る。

村井 というわけでもない……

めぐみ ここ、おごつてもらえるんですか。

村井 え。

めぐみ 私が出すんですか。事前にはつきり聞いておかないと気持ち悪いから。

村井 ああ。

めぐみ どっち。

村井 出します。

めぐみ だれが。

村井 僕が。

めぐみ こちそうさまです。

村井 いえ。こちらこそ。

めぐみ は。

村井 え。

めぐみ、村井のジュースをストローでかきまわす。

めぐみ 方法ってなんですか。

村井 え、その。

村井 ジュースをすする。水っぱい。まずい。

村井 方法っていうか、僕もドイツ語の勉強が好きだったから、その経験談でもお話できたら、って。

めぐみ いいのに。

村井 なにが。

めぐみ 勉強なんかほんとうはしてないのに。

村井 え。

めぐみ しなくてもいいんです。私、喋れるんです。小さい頃むこうに住んでたから。

村井 そうなの。

めぐみ 今でも時々友達が日本に来ますよ。人生相談しにくる。

村井 人生相談って、ドイツ人の。

めぐみ エレーヌとか、ミハイルとか。

村井 ミハイル。

めぐみ ミハイルは有機化学が専攻でね、たまに専門用語がわからなくて困るけど。

村井 そうですか。

めぐみ ドイツ語、好きなんですか。

村井 それほどのことは。

めぐみ 何年ほど勉強されたんですか。

村井 いや、大学の、教養で、2年か。……いや、単位落としたから、3年か。

めぐみ 落としたんですか。

村井 ああ、初級のクラスの。

めぐみ へえー。

村井 ジュースを飲む。

めぐみ 経験談、ってなんですか。

村井 いや、いいよ。

めぐみ でも用件でしょ。それが。

村井 いや、もういい。

めぐみ なに。

村井 文法は実はいいかげんでいいんだよ、とかね。

めぐみ なに。

村井 やっぱり語学は単語の量だよね、とかね。

めぐみ はい。

村井 言おうと思ってたんだけどね。

めぐみ はい。

村井 やめた。

めぐみ その通りじゃないですか。

村井 え。

めぐみ その通りだと思う。仮定法過去完了を意識しながら喋ってるドイツっ子なんかいませんもんね。

村井 あ、やっぱり。

めぐみ そりゃそうですよ。的確な経験談だ。

村井 いや。失敗談というか。

めぐみ バイト料、出しますね。

村井 なんの。

めぐみ 助言に対するバイト料。

村井 なに。

めぐみ 今、助言したじゃないですか。私に。

村井 助言なんかしてないよ。

めぐみ わざわざそのために出かけて来たんですよ。わざわざ呼び出して。じゃお礼はしないと。

村井 僕はただ雑談できたらいいなあ、と思っただけで。

めぐみ あれ。そうなんですか。

村井 あ。

めぐみ なあんだ。

村井 困った。ジュースをかきまわす。

めぐみ はそれを見つと見ている。

めぐみ 観察してると、おもしろい。

村井 え。

村井 かきまわす手を止める。

めぐみ おかしい。見てると。

村井 どこが。

めぐみ くよくよしてるところが。

村井 くよくよ？

めぐみ そういう匂いがする。

村井 匂い？

村井 自分の脇の下の匂いをかく。

めぐみ 中川先生のことですよ。

村井 え？

めぐみ そうですよ。

村井 あ、中川。

めぐみ 自分の話だと思ったでしょ。

村井 思わないよ。

めぐみ 思っているんですよ。正解だから。

村井 え。

めぐみ おかしい。おたくも。中川先生と同じ匂いがする。

村井 え。

めぐみ、バナジュースを飲む。

めぐみ うわ。

村井 ……。

めぐみ すごい。ほんとだ。水っぱい。

村井 ……。

めぐみ カルキの匂いもある。ほら。飲んで。

村井 おたくじゃないよ。

めぐみ 飲まないんですか。

村井 俺は村井、っていうんだよ。

めぐみ 全部のみますよ。

村井、飲む。

めぐみ 匂いに腹が立って、私は時々嘔吐してやるんです。

村井 中川を。

めぐみ 犬ですよ。飼ってる犬。玄関先の半径2メートルの中で一生お散歩を待ってる犬。半径2メートルは

やつの匂いがしみついてしまう。

村井 嘔むだろう。

めぐみ 嘔みませんよ。ただ嘔られてる。

村井 そう。

めぐみ 人間はくよくよしながら待ちますね。くよくよ考えても仕方ないのに。昼寝で、夜寝で、朝お散歩して、永久に繰り返すのだ。変わりはないのに、おかしい。

めぐみ、立つ。

村井 あれ。

めぐみ 用事、終わりましたね。

村井 いや。その。

めぐみ 雑談でしたし。

村井 いや。あの。

めぐみ 私、やっぱここ、払いますね。自分の分だけ。

めぐみ、自分の財布からお金を出そうとして。

村井　ちがうんだよ。ほんとの用事は。
めぐみ　はい。

村井　ほんとの用事は、違うんだよ。
めぐみ　なんですか。

村井　いや。その。

めぐみ　くよくよしてる。

村井　え。

めぐみ　おたく。

村井　ジュースを飲む。

めぐみ　うわ。

村井　部屋にきてほしいんだ。

めぐみ　部屋？

村井　僕の部屋。

めぐみ　どうして？

村井　わからない。帰らないでほしい。

めぐみ　どうして？

村井　僕の部屋に泊まっていつてほしい。理由はよくわからない。

めぐみ　……バイト料、出します？

村井　出せない。

めぐみ　はつきりしてるじゃないですか。

村井　え。

めぐみ、村井のジュースをストローでかきまわす。

めぐみ　一回だけ嘔まれたことがある。

村井　中川に？

めぐみ　犬ですよ。傷が足に、残ってる。見ます？

村井　どこ。

めぐみ　太ももの、上の方。

村井　え。

めぐみ　ほら。

めぐみ、太ももを見せる。

村井　俺は、嘔まないよ。

めぐみ　そうですか。

村井　嘔まなくともいいと思うよ。くよくよしててここがおかしい。

めぐみ　だつて。おかしい。

村井　おかしくない。一緒に、くよくよしようよ。

めぐみ　え。

村井　俺は、熱烈に一緒にいてほしい。理由もなくそう思う。そう思うのはなんかおかしいか？

めぐみ　……。

めぐみ、太ももを隠す。

めぐみ　聞いたでしょ。母の話。

村井　え。

めぐみ　あれだけじゃないんですよ。他の男にも手を出して。

村井　なにも聞いてないよ。

めぐみ　私の留守に連れこむんです。父は二人目だし、娘に色目を使うし、うちの家庭は複雑なんだ。私はかわいそうな子供なんです。

村井　娘つて、めぐみちゃん。

めぐみ　そう。でもきつと私も繰り返す。子供も繰り返す。半径2メートルの中で永久に繰り返す。

村井　……そう。

めぐみ　椅子。

村井　え。

めぐみ　椅子をさつきみたいにしてほしい。

村井　え。

めぐみ　気分よかつたんだもん、あれ。

村井　……。

村井　椅子を元に戻してやる。

村井　クーラーだつてあるんだよ。

めぐみ、村井を見つめる。暗転。

夫婦がおなかの懐中電灯を点滅させている。さつきよりもまわりが薄明るい時間になった。

妻 手が疲れましたよ。

夫 そうだね。

妻 いませんよ。やっぱり。

夫 そうだね。

妻 夜が明けてきますよ。

夫 ……。

トモヨがそこに歩いてくる。

二人に気がつき、足を止める。

夫 いや、いるよ。

妻 どの。

夫 ここにいる。

妻、あきた。懐中電灯を消す。

トモヨと目が合う。会釈する。

妻 おしり、冷えたでしょう。

夫 大丈夫だって。

トモヨ、少し離れたところにしゃがむ。

妻 お散歩ですか。

トモヨ え。

妻 朝は、すずしいから。

トモヨ はい。

妻 早起きは三文のトク、ですからね。

妻、懐中電灯を点け、消し、に参加する。

妻 私のおしりが冷えてきましたよ。

夫 大丈夫だよ。

妻 私が下痢しますよ。

夫 おまえは大丈夫だよ。胃袋が鋼鉄でできてるんだから。

妻 そんなことはありませんよ。

夫 放射能を食ったって壊れやしない。

妻 壊れますよ。

夫 核廃棄物だって処理しちゃうんだから。

妻 処理しませんよ。人間なんだから。あなたはもうなんですか。
夫 俺のはビニール袋みたいなものだよ。
妻 まあ素敵。
夫 生ゴミと一緒に腐っちゃう。けどいつまでも残っちゃう。胃袋だけがグジグジ残るんだ、きっと。か
らだが減びても。ビニール袋だから。
妻 なんだかっこいいですよ。
夫 かつこいいか。
妻 素敵ですよ。
夫 ビニール袋が。
妻 鋼鉄よりはかつこいいですよ。だけど鋼鉄だつていつまでも残るんじゃないんですか。
夫 いや、鋼鉄は錆びるだろ。
妻 はい。
夫 錆びて、割れて、ぼろぼろになつて、土に帰るんだよ。自然に帰る。だから核廃棄物なんてあつというま
に零れて広がっちゃう。中身は残して、自分はさつさと消えていくんだ。安らかなもんだね。ビニール袋は
違うよ。人工的に作られた合成物質だからね。変質しないように工夫されたものだから、まわりに迷惑をか
けながらいつまでもグジグジグジするだけなんだ
よ。

妻 あら大変。
夫 安らかになくなってくれたらいいと思うよ。
妻 私だけなんていやだ。
夫 そう。
妻 あなたと一緒に消えましょうよ。安らかに消えましょうよ。
夫 そうだね。そのほうがいいね。
妻 そうですよ。私は一緒にいい。
夫 そうだね。でも無理かもしれないよ。ビニール袋なんだから。
妻 そうですか。
夫 そうだよ。
妻 いやだな。
夫 しかたないんだよ。

二人の懐中電灯は点いたり、消えたりして。

トモヨ なんを見てるんですか。
妻 え。
トモヨ なにか見てるんでしょ。
妻 いえ。見てるんじゃないんですよ。
トモヨ はい。
妻 探してるんですよ。
トモヨ なにを。
妻 いえ、つまらないものです。

夫 つまらなくないよ。

妻 そんなこと言つてませんよ。

夫 言つたじゃないか、今。

妻 そういう意味じゃなくて。

トモヨ なんですか。

妻 いえ。つまらないものなんですよ。

夫 ほら言つた。

妻 ……。

トモヨ なんですか？

夫 蛭ですよ。

トモヨ 蛭？

夫 そうです。

トモヨ いますか、今頃。

妻 だからつまらないものなんですよ。

夫 ……。

妻 雨だつて降つたのに。ねえ。

夫 いいじゃないか。いるんだから。ここに。

トモヨ どこに？

夫 ……。

妻、懐中電灯を消す。

妻 これですよ。

トモヨ はい。

妻 こんなことが蛭だつて言うんですよ。

妻、懐中電灯をトモヨに渡す。

トモヨ、それを点ける、消す。

妻 違いますよ。蛭はこんなじゃない。もっとやさしく点くし、やさしく消えますよ。ねえ。

トモヨ はあ。

妻 私たちはね、時々眠れないんですよ。

トモヨ はい。

妻 しかたがないから散歩するんです。こうやつて。

トモヨ 明日、お仕事でしょう。

妻 やめちゃつたんですよ。子供が死んで。

夫 おい。

妻 いいじゃありませんか。きいてもらつたら。

夫 すいません。

トモヨ いえ。

妻 子供が死にましてね。この人は泣くもんだから、眠れなくて、仕事が続けられなくなって。隣で泣くもんだから私も眠れなくて。でも私よかったですよ。

夫 どうして。

妻 私たち仲良くなつたじゃありませんか。あの子が死んでから。

夫 そうかな。

妻 二人でよくお話しするようになったじゃないですか。

夫 ただ歩きまわってるだけじゃないか。

妻 ただ歩きまわってるだけでも素敵ですよ。あなたも前より素敵になった。私前より好きになりましたよ。

夫 やめなさいよ。

妻 あらいいじゃないですか。きいてもらったら。

夫 ……すいません。

妻 ほんとのことなんですよ、全部。

夫 嘘をついてどうするんだよ。

妻 だからほんとのことじゃありませんか。

夫 ほんとだからって全部話すことないじゃないか。

妻 全部話したっていいじゃないですか。全部ほんとのことなんだから。

夫 迷惑だろう。そんなことかされても。

妻 あら。迷惑ですか？迷惑してらっしゃいます？

トモヨ いえ。そんな。

妻 ほら。迷惑じゃありませんって。

夫 いいよ、もう。

妻 照れるんですよ、今でも。素敵だと思うわ、そういうところ。

夫 ……すいません。

トモヨ いえ。

妻 あなたもやってこらんなさいな。

トモヨ え。

妻 蛭ですよ。ほら。

トモヨ はあ。

妻 こうして。

妻、トモヨの手を取って、懐中電灯をおなかにいれてやる。

妻 点けて、……消して、……この人に合わせてやるんですよ。

トモヨ はい。

トモヨ、点けて、消す。

妻 あなた、ほら。

夫 うん？

妻 この人、上手ですよ。私より上手。

夫 ……ほんとうだね。
妻 よかったですね、一緒にできて。
夫 ほんとうだね。……ありがとう。
トモヨ いえ、そんな。
妻 あなた。どうしよう、私。
夫 なにが。
妻 なんだか、とつてもうれしくなってきた。
夫 そうだね。
妻 お友達になりましたよ。
トモヨ え？
夫 それがいいね。
トモヨ え？
妻 あなた、お友達になつてくださいな。
トモヨ お友達？だれとですか。
妻 私たちと。
トモヨ はあ。
妻 ……。

いつの間にか、点滅は止まっている。

夫 ご迷惑なんだよ。
トモヨ いえ。
妻 そうなんでしょうか。
夫 そりやそうだよ。
トモヨ いえ。
妻 しかたありませんよね。
夫 無理を言っちゃいけないよ。
トモヨ ああ。
夫 がまんしなくちゃいけないよ。大人なんだから。
妻 そうですよ。
トモヨ なります。
妻 はい？
トモヨ なりますよ。
妻 なに？
トモヨ お友達になります。
夫 いいんですか。
トモヨ いいんです。平気です。
妻 大丈夫ですか。
トモヨ 大丈夫です。
妻 ほんとう？

トモヨ　ほんとうです。

妻　あなた、ほんとうですって。

夫　ありがとう。

トモヨ　いえ。

妻　じゃあなた、こうするんですよ。私たちは毎朝こうして散歩しますから、あなたも毎朝散歩するんです。

それで、この川べりで、お会いするんです。それで、喋りするんです。それが、お友達ですからね。

夫　おまえ。毎朝なんて。

妻　なんです。

夫　毎朝は無理だろう。この人だって用事があるし。

妻　用事ありますか？

トモヨ　その……

夫　俺だって働くし。

妻　あら。働くんですか。

夫　そりやそうだよ。

妻　私、いつまでも働かないのかと思ってた。

夫　そんなわけないだろう。

妻　なんだ。つまんない。またさみしくなる。

夫　なに言ってるんだよ。生活しなくちゃ。

妻　なんだ。

夫　さみしくならないよ。

妻　そうですか。

夫　だって、仲良くなつたじゃないか。俺たちは。

妻　そうですか。

夫　そうだよ。

トモヨ　時々でいいんじゃないですか。

妻　はい？

トモヨ　それでも時々散歩されるんですよ。この川を。

夫　そうだろうね。

妻　しばらくは、そうですね。

トモヨ　じゃ私も時々散歩しますから。

夫　そうだね。

妻　そうですね。その時々とここの時々が時々、ドキドキ、つ

てあつちやう時に、お話しできますよね。

トモヨ　ええ。

妻　私たちも眠れないのが怖くなりますよね。楽しみができる。散歩してるうちに眠くなつても帰らないで待つことにしますよ。ちよつとだけ。あなたに会えるかもしれないって、ドキドキしながら。あなたが早起きして来るのを待ちますよ。

トモヨ　早起きじゃないんですよ。

妻　え。

トモヨ　私も今日、眠ってないんです。

夫 そうなんですか。

妻 あなたも泣いてたの？

トモヨ そうじゃないんですけど。

妻 どうして眠らないんですか？

夫 おい。

妻 はい。

夫 だめだよ。

妻 どうして。

夫 いろいろあるんだから。女性には。

妻 あら。私だって女性ですよ。

夫 おまえは違うよ。鋼鉄なんだから。

妻 あらま。そうきますか。

トモヨ 泣いてるんじゃないんですけど。

妻 はい。

夫 おい。

妻 いいじゃないですか。お友達なんだから。

トモヨ もがいてる、つていうのかもしれないなあ、つて。

妻 はい。

トモヨ 髪の毛が伸びないかなあ、つて。

妻 はい。

トモヨ そういう感じで。

妻 あなた。

夫 うん。

妻 わかりました？

夫 無理言うなよ。

トモヨ すいません。

夫 ……。

妻 あなた、蛍。

夫 あ。

妻 蛍、いなくなりますよ。

夫 そうだな。

夫、懐中電灯の点滅を始める。

妻 ちよつと貸してくださいね。

トモヨ はい。

妻、一緒に点滅を始める。

夫 そうだよ。

妻　　なんです。
夫　　もがくんだよ。きつと女性は。
妻　　そうなんですか。
夫　　髪の毛だつて、なかなか伸びないし。女性はだれでももがくんだよ。
妻　　私ももがくんですかね。
夫　　お前は違ふよ。鋼鉄なんだから。
妻　　あらま。また来た。
夫　　仲がいい私だっているじゃないか。
妻　　そんなもんですか。
夫　　そういうことだよ。

二人の点滅は続く。トモヨ、立つ。

妻　　お待ちしますよ。
トモヨ　　はい？
妻　　ここで、ドキドキしながら。
トモヨ　　はい。
妻　　ドキドキしてますか。
トモヨ　　え。
妻　　あなた、今。
トモヨ　　……すこしだけ。

二人の点滅は続く。それだけを残して、暗転。

第十一場　トモヨの部屋

中川が部屋の中でテーブルの上に乗って、立っている。

中川　　かえってこい。

そして、クーラーのあたる風の向きを探す。

中川　ぶるるるるるう。

中川、上半身の服を脱いでみる。そして、風に当たる。

中川　冷たいくらいだ……馬が、冷える……

身震いする。

中川　帰ってきたんだよ。俺は。後は、お前が帰ってきたら、いいんだよ。

風を浴びている。

中川　ぶるるるるるう。

トモヨの声　あ。

中川、その方向にからだの向きを変える。
トモヨが入ってくる。

中川　おかえり。

トモヨ　なに？

中川　どこ行つてたの。

トモヨ　どうやって入ったの。

中川　鍵、作ったんだよ。内緒で。

トモヨ　あ。

中川　あと、もう一つあるよ。俺の家に。

トモヨ　……。

中川　どこ行つてたの。こんな時間に。

トモヨ　どこだっていいでしょう。

中川　……。

トモヨ　おりて。

中川、おりる。

トモヨ　帰つて。

中川　帰らないよ。

トモヨ　ルール違反でしょう。こんな時間に。

中川　人に見られないように帰るよ。

トモヨ　そういう問題じゃないんです。

中川　じゃどういう問題なんだよ。
トモヨ　……。

トモヨ、座る。

中川　お茶、飲もうか。
トモヨ　いいらない。
中川　飲もうよ。

中川が台所に去りかけると、

トモヨ　私のことが知りたい？

中川　え。

トモヨ　私のことについて興味がある？

中川　あるよ。

トモヨ　ないみたい。

中川　あるよ。

トモヨ　ないよ。きつと。興味があるのは自分のことだけなんだよ。よく考えてみたら、わかる。
中川　そんなことないよ。

トモヨ　じゃ今考えてみましょう。手伝ってあげるよ。私、得意だから。

中川　いいよ。

トモヨ　さあ、あなたの肩の力を抜きます。抜いて、抜いてえ。でも関節までぬいちゃいけません。

中川　……。

トモヨ　やって。

中川　……。

中川、肩の力を抜く。

トモヨ　鼻の穴を広げないように。

中川　広がるかよ。

トモヨ　広がってますよ、自分では気づかないけど。

中川　……。

中川、鼻の穴が気になる。

トモヨ　じつと見つめて。私のことを。さあ、考えて。

中川　……。

トモヨ　考えて、……考えてえ。

中川　……。

トモヨ　ほら。

中川 なに。

トモヨ やっぱり。でしよう。

中川 どうしてだよ。

トモヨ あらまだ足りませんか。じゃあ目をつぶりましょう。

中川 いいよ、もう。

トモヨ よくない。

中川 いいよ。やらない。

トモヨ やって。

中川 お前のこと考えてなかったら、来るかよ。こんな時間に。

トモヨ それが素人の陥りやすい自己陶醉のワナだなあ。

中川 ねてないんだよ。俺は。

トモヨ 私も同じだよ。

中川 え。

トモヨ でもきつと理由は違うな。

中川 え……。

トモヨ なんでしようねえ、理由は。ちよつと待つてね。考えるから。

トモヨ、肩の力を抜く。目をつぶる。

中川、そのトモヨに近づく。

トモヨ うーん、と。

中川、トモヨに抱きつく。トモヨ、抵抗する。激しく。そのあげくに中川を平手打ち。

中川 ……。

トモヨ 教えてあげようか。私のこと。

中川 え。

トモヨ 座って。そこに。

中川 え。

トモヨ 座りなさい。

中川、座る。トモヨ、台所へ去る。

中川 え。

中川、ひとり罰せられた子供のように座っているしかない。トモヨ、出てくる。手にタオルを持っている。それを中川に投げてよこす。

トモヨ ほつぺた。

中川 え。

トモヨ それ。使つて。

中川 そのタオルで頬をおさえる。トモヨ、座る。

トモヨ 私、昔、とっても太つててね。小学生の頃。先生が心配するくらい。私は平気だったんだけどね。普通のおとなしい女の子だった。ある日、先生がおうちに来た。お母さんとなにやら相談したんだ。

中川 うん。

トモヨ 次の日から、縄跳びしなさい、つてことになった。朝6時に、毎日の日課。お母さんが見張るから、私は毎朝縄跳びした。そしたらやせた。やせたねえ、つてお母さんは喜んだ。先生も喜んでね、朝の連絡の時間に教室でそのことを皆に話した。

中川 うん。

トモヨ 隠れて努力したんですよおトモヨちゃんは、つていう美談だ。普段の私からはかけ離れたエピソードだったから、皆驚いてね。小学生なんて実に単純。皆に感動されてしまった。当のご本人は全然感動しないのに。

中川 うん。

トモヨ 困ったことがあるよ。そうやって。

中川 困ったのか。それ。

トモヨ 困ったよ。

中川 うれしくなかったのか。少しくらい。

トモヨ おかしな感じじゃなかった。だつて太つてすることはちつともいやじゃなかったし、痩せたこともちつともいいことだと感じなかったし。ただ、遠くから眺めたね。自分のことも、皆のことも。ああ、人々は喜んでいるなあ、と。それからだね。

中川 なにが。

トモヨ 元に戻らないんだよ。不思議に、ちつとも。食べても、食べても。元に戻つてやれ、つていたずらに思いつくんだけれど、太らない。でも、ほつとするんだね。その度に。ああ、人々の喜びや感動を小バカにするみたいにならなくてよかったなあ、気の毒だったもんなあ。と。

中川 うん。

トモヨ それ以来私の身体は魔法です。他人と自分を小馬鹿にするやせつばなしの魔法の身体。

中川 うん。

トモヨ もうしわけないけどそうなんです。だから、帰つて。

中川 なに言つてんだよ。わかんないよ。

トモヨ そりゃわからないでしょう。

中川 ……。

トモヨ ほら。

中川 なに。

トモヨ 人々は、ああ、怒つておるなあ。

中川 え？

トモヨ お茶くらい、飲むか。

トモヨ、立つと、中川が台所への進路をふさぐ。

トモヨ　人々は私を裏切っておるなあ、ああ、そしてそれを悔やんでおるなあ。

中川　うん。

トモヨ　まあ、相手しよう。適切に。小バカにしたらかわいそうだからなあ。

中川　……。

中川が台所に去る。

トモヨ　もがいておるなあ、中川。

トモヨ、テーブルを見つめる。

トモヨ　もがいてなんかないんだ。なにを言いくさる。ほつといてくれ。ラブホテルなんか行くもんか。

トモヨ、テーブルをみる。その上に乗る。

トモヨ　さむいー。……あ。

トモヨ、そのまましゃがむ。おなかをおさえて。

トモヨ　下痢、か。

テーブルに座って、うずくまる。

トモヨ　おしりが。くそ。冷えた、か。こんちくしとおつ。

中川、入場。ジュースとコップを持って。

中川　だれだよそれ。

トモヨ　え。

中川　だれとラブホテルに行くんだよ。

トモヨ　君以外のだれか。

中川　だれだよ。

トモヨ　君とは似ても似つかないだれか。

中川　……。

トモヨ　君はお金ないでしょう。

中川　ないよ。金だけじゃないよ。

トモヨ　え。

中川　なにもないよ。おれには。

トモヨ そう。

中川 そうだよ。自分のことだけかもしれないよ。
トモヨ そう。

中川 でもその自分はお前をほしがるんだよ。

中川、テーブルの上にいる。風を受けて立つ。

中川 おまえだってそうだろう。

トモヨ え。

中川 そうなんだよ。お前はきつと俺のところに戻ってくるよ。
俺が戻ったんだから。

トモヨ ……。

中川 ぶるるるるるるう。

トモヨ 雨がやんで、

中川 え。

トモヨ 雨がやんで、風が止まって、風が吹く。

中川 なに。

トモヨ アスファルトの粒々がわきあがる。息が止まる。

中川 ……。

トモヨ 私のそばには人がいない。

中川 おまえはラブホテルなんか行かないよ。

トモヨ けど馬がいた。

中川 なに。

トモヨ テーブルの上で泣いてしまう馬。

中川 泣いてないよ。

トモヨ 泣かないで。

中川 泣いてないって。

トモヨ 泣かないでね。

中川 泣いてないんだって。

トモヨ ……わからないよ。行くかもしれないよ。ラブホテル。

中川 大丈夫だよ。

トモヨ わからないよ。

中川 大丈夫だって。

トモヨ ああ。

中川 え。

トモヨ おならがでる。

中川 え。

トモヨ ……出た。

暗転。

第十二場 蛍のいない川辺の対岸

村井とめぐみがしゃがんでいる。

村井 いいの。

めぐみ いいですよ。

村井 ほんとに。

めぐみ ほんとですよ。

村井 なんだろう。

めぐみ どうしたんですか。

村井、立つ。屈伸運動を始める。

めぐみ なに。

村井 ……。

めぐみ 行きましようよ。

村井 ちよつと待つて。

村井、屈伸運動を続ける。

村井 脱いでいい？

めぐみ え。

村井 ちよつと、脱いでいい？

めぐみ え。

村井、上半身裸になる。そして屈伸運動を続ける。

村井 うれしいんだろうか。

めぐみ なにが。

村井 おれは、こうやってて、うれしいんだろうか。

めぐみ 知らない。

村井 うれしいんだよね、きつと。

村井 下半身も脱ごうとする。

めぐみ かっこいい。

村井 へ。

めぐみ かっこいい。村井さん。

村井 なにが。

めぐみ だって、ほら。うれしいんですよ。

村井 へ。

めぐみ うれしそうだから。

村井 ちゃんと喋れよ、さつきみたいに。

めぐみ むつかしいですよ。

村井 単純なことなんですよ、さつきみたいな。

めぐみ うーん。

村井、パンツ一丁になって、屈伸運動を続ける。

めぐみ クーラーつけなくてもいいですよ。お部屋に着いても。

村井 どうして。

めぐみ 私も脱ぐから。村井さんみたいに。

村井 どうして。

めぐみ だってかっこいいんだもん。

村井、屈伸運動を続ける。

村井 あれ。

めぐみ はい。

村井 蛭がいるよ。

めぐみ どこに。

村井 あそこ。川向こう。

めぐみ いませんよ。こんな季節に。

村井 いるんだよ。ほら、……ついた。

めぐみ あ。

村井 消えた。

めぐみ ほんとだ。

村井、屈伸運動をやめる。

村井 蛭もうれしそうだ。

めぐみ　　そうかな。

村井　　そうだよ。

村井　腕立てふせを始める。めぐみ、かっこいいと思っ
てみている。
暗転。

第十二場　トモヨの職場

仕事着のトモヨ、入場。第4場と同じく図面の束を抱えている。

トモヨ　　うりやつ。

またしても図面の束を取り落とす。

トモヨ　　んもう。

拾い上げる。机の上に広げる。戸口の方を振り返る。だれもこ
ない。作業を続ける。

トモヨ　　……整備計画図、……地域計画図、……建設計画図、……土地
利用計画図、これだ。

机の上に広げる。

トモヨ　　色鉛筆だ。

手を離すので、またもととおりに丸まる。

トモヨ　　あーあー。

紙を広げ直して色鉛筆を四―五本、その紙の端に置き、おさ
えながら作業を始めようとする。
戸口の方を振り返る。だれもいない。

トモヨ おはようございます……。。

そうやってる間に紙は丸まる。逆向きに紙を丸める。そして机に広げる。

トモヨ コーヒーが飲みたいなあ……。

手を止め、もう一回紙を逆向きに丸める。立つ。

その作業をしながら、戸口のほうへ行く。

トモヨ 豪快な遅刻すなあ、今日は一段と。

戻り、作業を始める。村井が入ってきた。上半身裸だ。段ボール箱を抱えている。

トモヨ おはようございます……うわっ。

村井 お。

トモヨ あれ。

村井 あれえ。

トモヨ なんですか。

村井 トモヨちゃん、あれえ。

トモヨ どうして裸なんですか。

村井 裸？裸じゃないよ。

トモヨ 裸じゃないの、それ。

村井 裸じゃないよ。これは。ズボンはいてるでしょう。これを裸とはいわないよ、普通。

トモヨ いうよ。普通。

村井 裸っていうのはね、

村井、ズボンを脱ぎ始める。

トモヨ 了解了解。

村井 あれえ。どうしてこんなところで落ち着いて。休憩？

トモヨ 休憩じゃないよ。お仕事でしょ。

村井 ひとりぼちのさみしいわかし。

トモヨ さみしくありませんって。お仕事です。

村井 涼しいね、ここは。

トモヨ そう。

村井 暑いよ、今日は。

トモヨ そうかな。

村井 中にいるとね、わからないんだよ。

トモヨ なに？また。使い走り。

村井 業者の肩代わり。人が足りないのと、すぐ「行けえ」だ。中小企業はファシズムだから。

トモヨ そうなんだ。

村井 むひー。……服、着るか。

トモヨ 着なさい。

トモヨ、作業にかかる。

村井、上半身の服を着る。ランニングシャツだ。

村井 極楽だ。

トモヨ なにそれ。

村井 なにつて。

トモヨ 服？それ。

村井 服だよ。ズボンのポケットにつこんでたんだよ。

トモヨ シャツじゃない。

村井 シャツだって服でしょう。それともなに？これは雑巾？私は雑巾を全身にまとったわけですか。

トモヨ それはシャツです。

村井 私もそう思います。

トモヨ、作業に戻る。

村井 失礼かな、つて気を使ったんだよ。

トモヨ まだ十分失礼だよ。

村井 そんなことないつて。

トモヨ 趣味じゃない？

村井 趣味は豊富ですけど。

トモヨ いいけど。

村井 いいの？

トモヨ いいよ。

村井 じゃ、ぬうごおつと。

村井、シャツを脱ぐ。

トモヨ あね。

村井 リラックス、リラックス。

トモヨ いいけど。

村井 だってキモチイイだもん、はだかんぼ。

トモヨ ……。

村井 はだかんぼじゃないけど。

トモヨ わかりましたつて。

村井 ひひ。

村井 机にあごをのせて。

村井 仲良くやれよ。

トモヨ なに。

村井 中川と。

トモヨ やってます。

村井 ほんとかなあ。

トモヨ ……。

村井 ひとりぼっちで大変だね。さみしい。

トモヨ さみしくありませんって。

村井 だって、ひとりぼっちじゃない。今。

トモヨ そりやしかたないでしょ。お仕事だもん。

村井 それにしても、よほどの急ぎなんだ。その仕事。

トモヨ そうでもないけど。

村井 だあれも働いてないのに、ひとりぼっちで。

トモヨ え？

村井 熱心だ。仕事にうちこんでる。

トモヨ だあれも働いてない、ってなに。

村井 だって、だあれもないじゃない。今。ここのフロア。

トモヨ え？

村井 こつちのフロア。今。だあれもないよ。

トモヨ え。うそ。

村井 課長さんだけ、いたけど。

トモヨ うそ。どうして

村井 ほんとだって。

トモヨ、外に出る。

村井 ……コーヒーが飲みたいなあ。

トモヨ、戻ってくる。

トモヨ さっきまでいたのに。

村井 なんだか大変だねえ。

トモヨ なにが。

村井 早川さん、会社、やめるんだってね。

トモヨ やめる？

村井 ていうか、やめることになるっていうか。

トモヨ なに？

村井 あれ？

トモヨ　なにそれ。

村井　らしいよ。今、聞いたもん。

トモヨ　だれに。

村井　課長さん。農業やるんだって。信州で、奥さんの実家で、高冷地野菜作るんだって。

トモヨ　信州。

村井　もうかるのかねえ。農業なんて。

トモヨ　いつよ。

村井　今聞いたんだよ。突然じゃないですか、つてきいたら、突然なんだよ、つて不機嫌のかたまり。

トモヨ　早川さん、今どこ。

村井　知らない。

トモヨ　きいてない。

村井　きいてないの。

トモヨ、出てゆきかける。

村井　俺、砂糖二つね。

トモヨ　なに。

村井　俺もちよつと、休憩していくし。

トモヨ　……。

トモヨ、退場。

村井　極楽、極楽。

村井　トモヨの広げていた図面を眺める。

村井　土地利用計画図、……ふーん。

村井　色鉛筆でぬり始める。

村井　緑地、というからには、当然、緑だよな。

村井　別の色鉛筆を取り上げて、

村井　すこし青味を加えたりして、……深みのある緑地になったりして。

村井　図面を睨む。

村井　あ。違？。こゝ、通路か。

村井 唾を指につけて、消す。

村井 境界線が細いんだよ。わからんよ、これではあ。…消去、消去、消去、消去。

トモヨ、入場。

村井 早いね。

トモヨ なんだそれ。

村井 だつたら。

トモヨ なんだそれは。

村井 皆どこいったんだって。

トモヨ 知らない。早川さんについていったんだって。

村井 来たの。早川さん。

トモヨ 挨拶に来たんだって。

村井 で、どこいったの。

トモヨ 知らない。そのへんの喫茶店じゃない。

村井 どこ。

トモヨ 知らないよ。無数にあるんだから。

村井 課長さん、不機嫌だろ。

トモヨ 怒られた。仕事してるのに。

村井 あらあ。

トモヨ なんだそれ。

トモヨ、座る。

村井 いいよなあ。信州。

トモヨ ……。

村井 きれいな空気、奥さんと二人。愛してるんだなあ。

トモヨ そんなわけないよ。

村井 へ。

トモヨ わたしとホテルはどうなったんだ。

村井 へ。

トモヨ どういうこと？

村井 知らないよ。

トモヨ、立つ。戸口へ。

村井 現実感のない話だなあ。新種のキュウリでも作るんだろうか。こんな巨大なやつ。

トモヨ 知らない。

村井 俺も彼女と農業でもやるか。近所で。ヒビ。

トモヨ やったら。

村井 ヒヒヒ。

トモヨ ……。

村井 俺さあ、

トモヨ ……。

村井 俺さあ、

トモヨ ……。

村井 聞いてよトモヨちゃん。俺さあ、

トモヨ なに。

村井 彼女ができた。

トモヨ そう。

村井 うれしいー。

トモヨ よかつたね。

村井 もう一人でも眠れるう。

トモヨ 眠れないよ。

村井 なに。

トモヨ そんなのは関係ないよ。

村井 どうして。

トモヨ 髪が長くてもだめなんだ。

村井 なに？

トモヨ アスファルトの粒々はそんなのじゃ防げない。

村井 ……。

トモヨ、座る。

トモヨ 自分が一番もがいてたくせに。

村井 なに。どしたの。

トモヨ 服。

村井 へ。

トモヨ 服、着なさいよ。服。

村井 へ。

トモヨ 着なさい。

村井 ……。

村井、ランニングシャツを着る。

村井 お気に召したでしょうか。

トモヨ みつともないよ。

村井 はい？

トモヨ そういうの、かつこわるいよ。

村井　はい？

村井　もう一回脱ぎかけると、早川入場。
顔にお面をつけている。

村井　あ。

早川　飯田さあん。

早川　手を振る。トモヨ、じつと見ている。

トモヨ　私のそばには、人がいない。

早川　手を振る。

トモヨ　だけど馬はいて、

村井、早川に手を振り返す。シャツを持つ手で。
シャツがヒラヒラとゆれる。

トモヨ　そんなことではちつともよくない。

早川、村井、手を振り合っている。トモヨ、ただ見ている。暗転。

第十四場　蛍のいない川辺・トモヨの部屋

夫婦二人が懐中電灯を点滅させている。

妻　来ますかね。

夫　どうだかねえ。

妻　来ますよ、きつと。

夫　わからないよ、そりゃ。

妻　私はドキドキしてるんですよ。

夫 そうだね。

中川、歩いてくる。二人をみる。

妻 眠れせんねえ。

夫 ほんとだねえ。

妻 ほんとに眠れなくなりましたねえ。こんなことしてるから。

夫 眠たくならないね。

妻 あなたお仕事どうするんですか。

夫 探さないかねえ。

妻 やめましょうよ。

夫 なにを。

妻 お仕事、探すの。

夫 そういうわけにはいかないよ。

妻 私は、こうしてるほうがいいですよ。

夫 ……そうだねえ。

中川、となりにしやがむ。

妻 夏が終わったら、消えましようよ、私たち。

夫 そうはいかないだろう。

妻 だけどね。

夫 ……ああ、

妻 このまま、消えてしまったら。

夫 そうだね。

中川、立つ。馬になる。風を探して。

中川 ぶるるるるるるる……

夫婦二人、中川をみる。

中川 ぶるるるるるるるるるるる……ぶるるるるるるるるるるる……

おさまり、しばらくすると、

夫 蛍になっちゃうねえ、このままだと。

懐中電灯の点滅を残して、部屋の明りが点く。

トモヨは二つのコップとジュースを手にして、電気を点けた。戸口の方角を見て、

トモヨ 馬よ、来い。

テーブルの上にコップを置く。ジュースをそれに注ぎながら、

トモヨ 私のそばに、馬よ来い。私の息をとめに来い。私の息は、馬の息。

コップを一つ持つ。戸口の方角を見て、

トモヨ 馬よ、来い。

テーブルにのる。ジュースを飲み干す。
暗転。おしまい。